

エルサルバドル

未来へと歩みだした中米の小国から

四年前、平和が訪れた。

しかし、首都の華やかさと田舎の貧困の差は存在し続けた。

二年前、総選挙は成功した。

しかし、農地改革は進まず、富の偏在は解決されなかった。

現在、多くの問題を抱えながらもエルサルバドルは確実に動き始めている。

未来に、何も期待できなかった暗い時代に別れを告げ、前向きな若者の姿をようやく肌で感じるようになってきた。

都市の喧噪の中で、地方の山の静寂の中で、いたるところでそれを感じた。

雨季の真つ最中だというのに灼熱の太陽は容赦なくバスの天井を照りつける。座っているだけで汗が体中から噴き出してくる。運転席の斜め前に取り付けられた小さな扇風機は、なま暖かい空気を乗客の座席に向けて吹きつけ、気分を悪くさせる。

予想はしていたが、乗客がいつぱいになるまでバスは出発しない。予定の時刻をすでに四十五分も過ぎている。その間にも、バナナ、西瓜、水、鶏のフライ、飴、コーラなどで籠やバケツを一杯にした物売りたちが入れ替わり立ち替わりバスに乗り込んでくる。暑さと人いきれで出発前から疲れが出てくる。やがてバスターミナル係官の耳をつんざくような笛の音にせつつかれてバスは出発する。

目的地はエルサルバドルの首都サンサルバドルから約百六十km、サンミゲール州の北西に位置するバリオス市である。東エルサルバドル最大のバスターミナル、サンミゲールから乗り合いバスで約三時間の距離である。バスは、中米を貫くパンアメリカンハイウェイから北に進路をとり、いくつかの町で乗客を降りさせながら、穴だらけのアスファルト道路をひた走る。

時間がたつにつれ、窓の外の風景も次第に変わっていく。平地から山道へ。真つ青だった空も、雨季の気まぐれな天気には似、車窓の変化に合わせて雨雲が広がり始めた。大粒の

雨がバスの窓をたたきつけ、豪雨となってきた。石を敷き詰めた山道に入ったバスは、タイヤをスリップさせながら進んでゆく。ワイパーが壊れているバスは、降りつける雨のためほとんど前が見えず、運転手の勘だけで前進していく。左右に揺れるバスは、重苦しい雰囲気を出し出す。急な斜面の渓谷をゆっくりと進む。バリオス市は緑の山の中にひっそりとたたずんでいた。サンミゲールから一緒であった女学生は、横に座った東洋人が気になるのか、落ち着かない様子である。何度となく話しかけようとしているのがわかる。

「どこまで行くんだい」。こちらから声をかけてみた。「チャペルティケまで。あなたは?」。「バリオスまで。ロメロ大司教の生まれ故郷を一度訪ねておきたかったんだ」

悲惨な内戦が続いていた一九八〇年代、民衆の精神的支柱となり、軍部の政策に堂々と異を唱えていたロメロ大司教。彼の肖像画は、エルサルバドルだけでなく、軍部の横暴が今も続く隣国グアテマアラの人権団体のオフィスにも飾られていた。今

回のバリオス市行きは、エルサルバドルの中でも、これまで行ったことのない北東地域への目玉にするつもりでもあった。

エルサルバドルへの旅行は今も昔も一般の旅行者にはあまり勧められていない。かつては内戦のため。今は犯罪のためだ。確かに内戦終結までは、町中を警備していた政府軍兵士の、外国人に向けるまなざしは冷たいものがあり、「二度とこの国に来たくない」との印象を与えていた。現在のこの国は、内戦の避難民としてアメリカに逃れた人々の一部がエルサルバドルに強制送還され、彼らがギヤング集団を作り上げて問題となっている。以前なら首からカメラをぶら下げ、堂々と街の中を歩けたのだが、今回はそうしようにも少々危険を感じた。街の雰囲気が変わってきた。

とり立てて何ら見るべき所のない山奥の町バリオスにゲストハウスが一つある。しかもシャワーはお湯が出る。不思議に思つてオーナーに理由を尋ねてみた。

「内戦が激しかった頃のバリオスには、サンミゲール州の山間部で政

府軍の最強の基地があった。ゲリラ側は、バリオス市の東約5kmに陣取り、政府軍基地に攻撃を何度も繰返していた。ロメロ大司教が暗殺された一九八二年には、ゲリラ勢力は、町の政府建造物のすべて焼き払つてしまった。当時首都からは、バリオス市の攻防を取材する報道陣が多く訪れていた。ここは、その取材陣向けのゲストハウスであつた」

彼女はそう答えてくれた。もっとも、今はここに宿泊するものは皆無である。

バリオス市の倉庫のような建物の中で若者たちが踊りの練習をしている。若い二人は、カメラを向けられ、最初はにがんでいた。ところが、ダンスの練習に熱が入るにつれて、第三者の存在も忘れ、汗びっしょりながら音楽に合わせ練習を続ける。収穫祭の踊りの一つであろう。

次の週に迫つたペルキン市でのダンスコンテストに向けての練習である。バリオス市のような山奥の町では働くところといえば、コーヒー農園とその加工工場くらいである。学校を終えても地元には働き口はな

く、ほとんどの若者が大都市へと出

ていく。そんな町に住む若者たちの生活の一面を垣間見た。

サンミゲール市から北へ約百三十km、ホンジュラス国境がすぐ目の前に迫るペルキン市は、かつてのFMLN（ファラブンド・マルティ民族解放戦線）ゲリラの首都でもあつた。町外れには、この国唯一の革命博物館があり、エルサルバドル人以外に、外国人の姿を見かけることがある。毎年八月三日から五日まで、ペルキン市では小さな祭りが催される。九二年の停戦の年に始まつたこの祭りは、今年で五年目を迎える。

伝統や歴史、華やかなページェントや大がかりな屋台もない手作りの祭りであるが、サンミゲール州北部の多くの町から人々がやってくる。

エルサルバドルには大きく分けて三つのお祭りがある。クリスマスと復活祭はカトリックの国らしい伝統である。あと一つは、各地方ごとに、その土地の有力者（多くは市長や財力のある土地所有者）が後援者となつて盛り上げる地方の「守護神」を讃える祭りである。

エルサルバドル第二の都市サンタアナでのその祭りの規模は大きく、

一週間ぶつ通してイベントが続いていた。聖母マリアの母親サンタアナにちなんだ四百年の伝統あるその祭りは、コスタリカやグアテマラからの参加者も多く見られた。クライマツクスは、イエス・キリスト像の巡

礼行進であるが、それ以外にも、仮装行列、美人コンテスト、花火の打ち上げ、夜店などがあり、多くの人々を楽しませる。今回は特別に、犯罪が増えてきたエルサルバドルの治安を守るために作られた警察特殊部隊の訓練の様子が、初めてサンタアナ市民に披露された。かつて一般市民を恐怖のどん底に陥れた軍部の特殊部隊の再来を危惧する人はいないかと、訓練の様子を見物してきた人々に話を聞いた。しかし、そういう人はだれ一人いなかった。内戦終結から四年がたち、ゲリラの武装加除も軍部の改革も成功した今、それは杞憂であると自分に言い聞かせた。

山奥で始まったばかりの新しい祭り、都市部で何百年と続いてきた伝統のある祭り。場所は違えど、この二つの催しに参加していた若者たちの躍動感は忘れられない。さまざまな問題を抱え続けるエルサルバドル

であるが、次に訪れる時にはどんな新しい姿を見せてくれるか、今から楽しみである。

写真キャプション

・呼吸を合わせて収穫祭のダンスを練習する若者たち。全員の動作がそろうまで何度も繰り返し練習していた(バリオス市)

・祭りの期間、エルサルバドルで最も有名な大聖堂の周りには多くの屋台が並ぶ。朝早くから夜遅くまで多くの人が集う、町の中心にもなる(サンタアナ市)

・祭りの喧騒の陰で二人だけの世界を楽しむ若い男女。かつてのゲリラの首都での光景だけに、あらためて平和の大切さを感じる(ペルキン市)

・ダンスの直前、入念に化粧をする若い女性たち。練習の成果を観衆の前で十分にさせるか心配していた。(ペルキン市)

・内戦が終結して4年。経済発展がめざましいといわれるが、失業率はまだ高い。買い手のほとんどいない物品を市場で売り続ける男たち(サンタアナ市)

・トウモロコシ挽いた粉で作ったトルティーヤ(パン)を焼く女たち。

トルティーヤは中米各国の主食でもある(メタパン市)

・米国ロサンゼルスで大学教育を受けたロメロ氏は、ボランティアで子供たちに英語を教えている。貧しさのため学校に行けない子どもまだまだ多い(バリオス市)

・田舎では子どもたちも貴重な労働力の一部。山で集めた燃料用の薪を町に売りに行く。学校へ行く余裕は、もちろんない(バリオス市)

・ゴミ捨て場に生活の糧を見いだす人々も多く存在する。首都で生活する人には信じられない生活がある。ゴミの中で親を待つ長内子ども(ネ八卦市)

・エルサルバドルは敬虔なカトリックの国。どの町の教会でも熱心に祈る人々の姿を見ることが出来る(サンタアナ市)